論文審査要旨及び担当者

報告番号　甲　乙　第　　号　　氏名　冨塚亮平

論文審査担当者

主査　慶應義塾大学文学部英米文学専攻教授　　巽　孝之　文学研究科委員、Ph.D.

副査　慶應義塾大学文学部英米文学専攻教授　　大串尚代　文学研究科委員、Ph.D.

副査　早稲田大学文学学術院教授　　堀内正規

副査　カリフォルニア大学サンタバーバラ校名誉教授

クリストファー・ニューフィールド（Christopher Newfield）、Ph.D.

論文題目　**The Moment of Transition: Plasticity in Ralph Waldo Emerson's Writings**（変化の瞬間――ラルフ・ウォルド・エマソン作品における可塑性）

本研究は、19 世紀中葉のアメリカン・ルネサンス期を代表する作家・思想家ラルフ・ウォルド・エマソン(Ralph Waldo Emerson、1803-82)の作品群において、自己と他者が構成する多様な関係性がいかなる形で表現されてきたのかを、硬直性と柔軟性を脱構築する「可塑性」(plasticity)という概念に主に焦点を当てることで再検討する。体系の不在でも完結したモデルでもない、両者の中間に位置する、目的を固定せず常に変貌し続ける可塑的な体系にエマソンの本質を再設定するという最新の理論的視点から彼の諸作品を抜本的に読み直し、同時代のロマン派作家たちとも比較考察した洞察力に富む論考である。

主論文各章は以下のように構成されている。

Introduction: Plasticity and Emersonian Transcendentalism

Chapter 1: "The Plastic Power of the Human Eye": "The Animal Eye" and a Poetics of Ambience in *Nature*

Chapter 2: "A Zigzag Line of a Hundred Tacks": Emerson's Plastic Self in "Self-Reliance"

Chapter 3: From "Genius" to "Practical Power": The Logic of "Moods" in "Experience"

Chapter 4: Conversation and a Poetics of Distance: Emerson's "Friendship" and His Beautiful Enemies

Chapter 5: "A Household is the School of Power": Emerson's Domestic Economy in Representations of Space

Conclusion: Emerson's Plastic Americanism: The Community of the Eccentric in "The

American Scholar”

論文の概要

序章　Plasticity and Emersonian Transcendentalism

これまでのエマソン研究において、彼の多岐にわたるテクストを貫く一貫性は果たして存在するのか、もし一貫した体系やモデルが彼の思想を規定しているとすれば、それはどういったものなのか、という主題は、しばしば論じられてきた。しかし本論文は、体系の不在でも完結したモデルでもない、両者の中間に位置する、目的を固定せず常に変貌し続ける可塑的な体系こそをエマソンの思想に見出し、改めて評価する。絶えざる変容にさらされつつその都度、仮の同一性を確立していくようなエマソンの自己形成における「可塑性」を軸に「ジグザグの航路」や連続する「円」の比喩に喩えられるエマソンの文学的軌跡におけるさまざまな「変化の瞬間」(“the moment of transition”)を追うことで、最終的に本論文は、人間の限界を超越し、神やイデアの領域へと到達することではなく、日常的な経験の領域で対話と変化を継続することを目的とする、特異な「距離の詩学」に特徴づけられる思想を表現するものとして、彼のテクスト群に新たな光を当てようと試みている。

序章では、固有の目的を定めずに変化を続けるエマソン像を強調する先行研究として、Sacvan Bercovitch による「聖書予型論」(typology)と「嘆き」(jeremiad)の議論から、類似する視点を変形・発展させた、Stanley Cavell が提唱する「エマソンの道徳的完成主義」(Emerson’s moral perfectionism)の思想へと至る系譜を概観する。そしてエマソンの思想を固有の前提や目的へと帰属させない「反基礎づけ主義」(non-foundationalism)として読み直す Cavell による解釈とも響きあう概念として、Catherine Malabou が提唱する「可塑性」の概念に注目する。彼女の言う「可塑性」は語源である形づくるという意味のギリシャ語 *plassein* が孕む二重の意味、すなわち「形を受け取る能力」と「形を与える能力」を同時に意味し、エマソンが講演「アメリカの学者」“The American Scholar”で強調した「創造的な読書」と「創造的な執筆」の循環過程と重なり合う。

それを確認した上で、序章では最後に、エマソンに影響を与えた同時代のアメリカ北部の知識人、特に彼とは Transcendental Club の仲間でもあった Frederick Henry Hedge が、Immanuel Kant の思想を独自に再解釈した Samuel Taylor Coleridge のテクストを、可塑的かつ反基礎づけ主義的な視点からいかに創造的に読み直したかを跡付ける。

第 1 章

“The Plastic Power of the Human Eye”: “The Animal Eye” and a Poetics of Ambience in *Nature*

「眼」や「視覚」のメタファーがエマソンにとって極めて重要なものであったことは、1836 年の『自然』(*Nature*)　に登場する最も有名な眼の比喩、いわゆる「透明な眼球」(“transparent eyeball”)によって広く知られる。しかし、本章で著者は Jonathan Crary や Martin Jay による 19 世紀の視覚論に関する研究を参照しつつ、従来「理性の眼」(the eye of Reason)に対して軽視されてきた「動物の眼」(the animal eye)へのエマソン関心に着目することで、新たな解釈可能性を開くことを目指し、最終的に、「人間の眼の可塑的な力」 (“The plastic power of the human eye”)が、支配的な『自然』の読みに反して、いかに重要な役割を果たしているかを再考している。

第 2 章　“A Zigzag Line of a Hundred Tacks”: Emerson’s Plastic Self in “Self-Reliance”

続く第 2 章、第 3 章では、自己と時間の関係性が探求される。この第 2 章では、1841 年のエッセイ「自己信頼」(“Self-Reliance”)において、一貫性を放棄してジグザグの航路を歩み続ける、現在の瞬間のみに集中する自己信頼のあり方が、多様なる他者との出会いから受けた影響に触発されていること、独創性をめぐるエマソンの思考それ自体が可塑的に変化を続けてきたことを辿り直す。

第 3 章　From “Genius” to “Practical Power”: The Logic of “Moods” in “Experience”

1844 出版の『エッセイ第 2 集』（*Essays: Second Series*）に収められた 「経験」（“Experience”)は、出版から二年前、1842 年に彼が幼い息子 Waldo を亡くしたという悲劇的な事実に触発される形で書かれたが、本章ではそこにおいてエマソンが「悲嘆」（grief）をはじめ「気分」(mood)や「気質」(temperament)といったより曖昧な情動全般について深めた思索を、近年の「情動理論」(affect theory)との関連を踏まえた上で精読している。とりわけ、自己と外部の関係性の変化を示すレトリックとして、エッセイ前半と後半でそれぞれ二度にわたり登場する、科学や生物学と関わる「レンズ」(“lenses”)や「胚」(“embryo”)のメタファーを、19 世紀当時の生物学における発達をめぐる議論の流れと関連させながら、「嘆き」(“grief”)を「実践的な力」(“practical power”)へと転化させるエマソンの戦略を再考する視点は鋭い。

第 4 章

Conversation and a Poetics of Distance: Emerson’s “Friendship” and His Beautiful Enemies

本章から結論へ至る過程では、自己と空間の関係性が前景化する。全 3 節から成る本章は、エッセイ「友情」(“Friendship”)を中心に、同テーマを展開した「愛」(“Love”)、ならびに両エッセイの原型となった 1838 年の講義「心」(“The Heart”）を、主に「受動性」と「距離」の主題に注目しつつ論じている。

本章の特色はエマソンと同時代作家たちの関わりに注目していることだ。まず、彼が友愛をめぐるエッセイ群において、他者との出会いの場として特に重要視している空間「街路」を媒介に、ゴシック作家 Edgar Allan Poe がロンドンの「街路」にひしめく多種多様な人々の姿を描く 1840 年出版の「群衆の人」(“The Man of the Crowd”）を比較し、ポーの「凝視」（gaze）とエマソンの「一瞥」（glance）を対照しつつ、書物との距離感を図っているのは興味深い。

書物との関係性は、エマソンがエッセイ「友情」で展開した「距離の詩学」とも明らかに響き合い、トラウマをもたらすような他者との「出会い」の瞬間を契機として築かれる、エマソンにとって理想的な友愛の関係性を織りなす。そもそも「友情」を含むエマソンのエッセイにおける魅力的記述の多くが対話的な起源を持っていたこと、とりわけ重要な意義を持つ「美しい敵」(“beautiful enemy”)としての友人という比喩が、実際に執筆時の友人 Margaret Fuller との言葉の応酬なくしては生まれなかったことの指摘は洞察に富む。

第 3 節では、エマソンの弟子にして自然文学および環境批評の祖とも言われる Henry David Thoreau がデビュー作である旅行記『コンコード川とメリマック川の一週間』（*A Week on the Concord and Merrimack Rivers*、1849）のセクション「水曜日」で展開した友情についての思考をエマソンと比較している。ソロー死後の弔辞講演 “Thoreau”において、この自然文学者が蜂などの動植物やモノともある意味で対話を行

っていたことを指摘しつつ、自らがソローの「こだま」（echo）と化していく歩みを読み取る解釈は思索力にあふれている。

第 5 章

“A Household is the School of Power”: Emerson’s Domestic Economy in Representations of Space

本章では、比較的マイナーな 1838 年の講義「家庭」“Home”を中心に、エマソンのエッセイや講義の一群を横断的に扱いながら、それらのテクストに見られる空間の表象、とりわけ家屋を巡るそれを中心的に取り上げ、私的空間と公的空間の境界を巡るエマソンの文彩に注目し、彼にとっての家政の問題を、ジェンダーや階級、人種の視点にも留意しつつ再検討する。彼が家庭内で実験的に友人や使用人達と結ぼうとした理想的な関係性は、扉を開き共通の空間を共有することでこそ育まれるものであったが、家庭内に時に扉を閉めきり関係性を遮断する権力を握っていた存在は彼だけであり、その裏には人種やジェンダー、階級をめぐる彼の想像力の限界もまた確かに刻印されていた。この点に留意しつつ本章は、可塑的に変化を繰り返すエマソンの自己観と並行するような空間の表象の最もラディカルな例を、「家庭」というテクストに見出し、あらゆる境界線を固定化から解き放ち、常に更新し直す運動の要素を孕んだ彼の文体が、自己を外界から隔離する「書斎」（study）ではなく、他者とともに語らう場としての「客間」(parlor)における Fuller との対話から触発されたものであったことを明らかにしている。

結論

Emerson’s Plastic Americanism: The Community of the Eccentric in “The American Scholar”

結論部では、ここまで徐々に関係性の範囲を拡げつつ展開してきた議論の締めくくりとして、アメリカという国家の理想像と「考える人」(“Man Thinking”)としての理想の学者像を対置する講演「アメリカの学者」を扱う。この章はまず、 Sacvan Bercovitch と Chris Newfield が 1990 年代に展開した、グローバリズムへと連なるリベラルな民主主義の立場からエマソンを批判的に読み解く研究を概観した上で、次にそれらに対するオルタナティヴな立場として、Cavell がほぼ同時期に展開した「エマソンの道徳的完成主義」に再び焦点を当てる。

「身近なもの、卑近なもの、平凡なもの」(the near, the low, the common)を讃えようとする同講演におけるエマソンのレトリックは、超絶主義者としてエマソンを捉えようとするような立場とは相入れない、隣人との対話にこそ理想の民主主義への足がかりを見出そうとする彼の姿勢を示す。このことをさらに吟味するために、 著者は Cavell のみならず Branka Arsić を援用し、コミュニティ内部の規範や同調圧力には決して屈さず、しかし同時にコミュニティ内部の周縁にあくまでもとどまろうとする「奇人」たちが、迎合と反感(aversion)、内部と外部、家庭と街路、親密圏と公共圏、それらいずれにも完全には同一化しない中間地点で、目的なき完成主義の過程を進んでいく歩みを輪郭づける。

本論文の最後では、エマソンを読む Cavell を読む Lauren Berlant による、親密公共圏における多様な他者との関係性をめぐる議論を補助線としながら、グローバリズムとアメリカ例外主義、「社会と孤独」（society and solitude）、柔軟性と硬直性といった対立を超えたユートピアのビジョンをエマソンの思想から読み取る。あらゆる人種・階

級・性に属する「奇人」たちが、それぞれ「独立した国家」(“a sovereign state”)のように接しあうことで、そこにはじめて「奇人たちの共同体」(“The community of the eccentric”)が誕生する。かくして著者は、エマソンの精読を通してエマソン自身の意図を超えるヴィジョン、すなわち 19 世紀アメリカ北部における「身近なもの」や「近しさ」をめぐる無意識的に偏った視点をも問い直す「可塑的なアメリカニズム」の可能性を導き出す。

審査の要旨

本論は、主としてラルフ・ウォルド・エマソンの前期の散文テクストを現代の視点から読み直し、論理的整合性に挑戦し二項対立を揺らがせる彼の言説の特徴を“plasticity”に求め、オリジナリティを打ち出そうと努めた野心的な試みである。各章の論述は、さまざまな先行研究（二次資料）の渉猟のみならず粘り強い論述、周到なリサーチ、明確な主張を明かすものであり、完成度が高い。その関心の範囲も、アメリカ 19 世紀前半におけるカメラの登場や望遠鏡などの視覚にまつわる技術の発展やまた領土拡張主義、都市化によるフラヌールの発生、男女の領域論など広く深い。副査の一人であるクリス・ニューフィールド教授からは、北米の大学院における博士論文とゆうに匹敵する水準に達しているという評価を受けている。

審査委員会は以上の共通了解を前提に、 2021 年 2 月 9 日（火）夕方 5 時より、研究室棟第一会議室に集合し、博士号請求者の口頭試問を行った。

質疑応答は、論者が採用する鋭角的アプローチの随所に潜む鋭い指摘の再確認という形で始まった。たとえば第 1 章の“animal eye”の観点、第 2 章の“memory loss”の問題、第 3 章の“enfant-like self”の視点、第 4 章の“distance”と“conversation”の問題、第 5 章の“hotel-like home”の概念、“Conclusion”の“community of the eccentric”など、各章に論者ならではの論点があり、きわめて刺激的な議論が展開されているからである。それらの各章をキー・コンセプトである“plasticity”すなわち「可塑性」がゆるやかに結びつけている。

現代的な批評理論を駆使する富塚論文の特質は、端的に言って「エマソンに逆らいつつエマソンを肯定する試み」であろう。しかし、それは諸刃の剣でもある。というのも、その先鋭的な姿勢において、エマソンの中心的な思想である〈普遍〉と人間の共通性 commonality の問題を富塚君が避けているように見えるからだ。それはエマソンが“Nature,” “soul,” “the Over-Soul,” “the Universal Being”, “spiritual laws,” “moral law,” “One,” “All”などといった単語で言い表そうとしたものであり、それは人間個々の差異を超えて誰にとっても共通する次元を強く肯定するための思想的営為である。主体がただ単に〈社会〉の次元で交わる他の人間たちとの関係のみに縛られていてはならず、社会とは異なる〈世界〉ないしは〈自然（宇宙）〉と自己との関係の次元が重視されるべきだというのがエマソン思想の根本だとすれば、富塚君には、前者に対する鋭利な洞察はあっても後者の次元への眼差しが欠けている。一体なぜそうした伝統的なエマソン研究の問題系を回避しなければならなかったのかという理由の説明は、序文等において十二分になされている必要があっただろう。

例えば、富塚論文では「エマソンの“transparent eyeball”のモデルは帝国主義的な側面を含む点で望ましくないが、“animal eye”の“glance”はよい」と主張しているように見える。だが、*Nature* の件のパッセージが提起しているのはそもそも他者が周囲に存在しない状態において自己が世界＝宇宙と交流することだったとすれば、“the Universal Being”の流れが自らを通過していくというヴィジョンは、それ自体が

dynamic で plastic なものであったのではあるまいか。

また、先行研究を精力的に咀嚼している点は買えるが、ただし Stanley Cavell と Branka Arsić の理論については過剰なまでに準拠しているので（副査の中には、富塚論文を読むことでむしろ難解な Cavell 論文が一段と分かりやすくなったと肯定的評価を下した者もいた)、そのぶん、著者自身のオリジナリティが弱まる箇所も散見された。その傾向はエマソンをアメリカン・ルネッサンスの同時代作家たちと比較する第四章においても当てはまる。たとえばポーの「群衆の人」における語り手の “gaze” とエマソンの “glance”の対比はあまりにも常識的だろう。だが全く同時に、著者が現代的な対話理論に立脚するため独断を下しているように見える箇所もあった。たとえば超越主義の同志にしてフェミニズムの先駆者フラーを友人として遇する際の距離が必要だという前提条件が設定されるが、エマソンにおいてはこうした距離感はむしろ弱点として意識されていたのであり、ここから独創的な議論を展開するには何らかの留保を付すことが不可欠ではなかったか。

第 5 章では、19 世紀中葉のニュー・イングランドにおける典型的な二階建て木造家屋の構造が Emerson の自己をめぐる思想に何がしかの作用を与えたことが指摘されており、環境から人間の思考を考えるという意味で興味深く刺激的な論点である。特に生前未発表の講演“Home”に取り組み男女のジェンダー・ポリティクスにまで踏み込んだ点は高く評価したい。ただしこのテクストの眼目は「家庭」や「家屋敷」としての “house”の問題にはなく、むしろその脱構築として、外界においては常に心の中で“at home”であること、自分の家にあっては自らが “stranger”としてあること、そして各人の内部には何らかの「普遍性」が共有されていることにあるのだから、そうした本質的側面に関する吟味が不十分であるように思われる。また、こうしたマイナーなテクストに現代的興味を覚えるのは理解できるものの、その一方で、メジャーなテクストが理由なく犠牲になっているのも否めないところだ。本博士論文全体に言えることだが、せっかく “plasticity”についての現代的な観点を打ち出しながら、*Nature* の “protean”なセルフの変容を謳った終盤部分をはじめ “History” “The Divinity School Address” “The Over-Soul” “The Poet”など、本来であれば論ずべきテクストについて論じられないままになっていることは、今後解決すべき大きな課題であろう。

ただし、こうした問題点も、本博士論文が達成した完成度をいささかも否定するものではない。口頭試問では、以後は膨大な先行研究に振り回されることなく、あくまで自身の視点を貫きながら論点をより一層整理し加筆改稿すれば、これは単著として英語圏でもじゅうぶん公刊可能ではないかという積極的な意見も提出された。

以上の経緯を踏まえ、審査委員会は、本論文に散見される若干のケアレス・ミスを修正するという条件を課した上で、冨塚亮平君の論文を博士（文学）の学位授与にふさわしいものと判断する。（2021 年 2 月 15 日）